

デザインマネジメント実践研究

— 神社の支援を通して —

The practical study on design management
— through support of a shrine —

ソーシャルデザイン学科

井上 友子・南 聡・井上 貢一・岩田 敦之

Tomoko Inoue / Satoru Minami / Kouichi Inoue / Atsuyuki Iwata

1. 背景と歴史

本研究は、研究者が数年にわたって取り組む香椎宮の再興に関する成果の一部を報告するものである。

福岡市東区にある香椎宮は、仲哀天皇・神功皇后の神霊を祀る神社として724(神亀元)年に創建された。古くは「香椎廟」と呼ばれ、朝廷より特別な待遇を受けていた。そのため、平成天皇から令和天皇への御代替行事、すなわち、「即位礼正殿の儀」が行われた2019年10月22日(火)には臨時の祭典が斎行されている。神社の名前は、927(延長5)年にまとめられた「指定官社」を示す全国の神社一覧『延喜式神名帳』(『延喜式』九～十巻)には記載されておらず、「香椎宮」が正式な名称として呼ばれるようになったのは明治以後のことである。

香椎宮は、祭祀に際して天皇により「勅使」が遣わされ、「勅祭斎行」(神社の祭祀に身を慎んで執り行う儀式)を行う16社(勅祭社)のうちの1社(本宗の伊勢神宮を除く)に選ばれている。九州・沖縄地域では宇佐に並び、香椎宮でも10年に1度天皇の勅使参向が行われる。

香椎宮は、1871(明治4)年、『延喜式』に倣って新たに神社を等級化した「近代社格制度」において、8万社の中から選ばれた62の官幣大社(九州・沖縄地域では9社)のうちの1社となった。1946(昭和21)年2月2日、国家が神社を管理する上記の「近代社格制度」が廃止された後も、香椎宮は人事上特別な扱いが必要とされる「別表に掲げる神社・61社」のひとつとなった。

香椎宮で執り行われる「勅祭斎行」のもっとも早い例は737(天平9/奈良時代/710~794)年まで遡ることができ、1925(大正14)年の斎行からは、上述にあるように10年に1度と定められた。近年の斎行は2015(平成27)年に執り行われ、奈良時代から139回目を数えた。

『日本書紀』や『古事記』などにもうたわれている香椎宮本殿(棟札8枚を含む)は、1801(享和元)年に再建され、1922(大正11)年4月13日にわが国の重要文化財に指定された(棟札は1966年/昭和41年6月11日の指定)。また香椎宮は、幣殿・拝殿のほか、「武内神社」「巻尾神社」などの摂社、「稲荷神社」「鶏石神社」などの末社を境内に、「濱男神社」「御島神社」などの末社を境外に擁する。さらに香椎宮には全国唯一の「勅祭」に関する文化財「参拝標石」、仲哀天皇の仮宮「櫃日宮(訶志比宮・古宮)」の伝承となった「跡跡」、神功皇后が三韓訪問から帰国した際に埋めたとされる剣・鉾・杖の三種宝、皇后が手ずから植え『新古今和歌集』にもうたわれた「綾杉」、300歳の長寿を全うした天皇・皇后の従者・武内宿禰が管理していた「不老水」など、多くの故事・奇譚をしのばせる枢要なものが少なくない。

2. 目的

研究者は2008年からデザインの方法論に基づく地域貢献活動を継続している。なかでも、福島八幡宮(福島県、八女市)の伝統的奉納行事「燈籠人形芝居」の「舞台背景幕」の制作・提供は2019年で6年目を迎え、重要無形民俗文化財の保護と持続的な運営に役買っている。背景幕制

作とその提供を続けるなかで、地域住民・八女市教育委員会・燈籠人形保存会からの厚い信頼を得ることにもつながり、結果としてデザインマネジメントを通して地域に貢献する一つの姿が具現化できていると考えている。

本研究では、そのような福島八幡宮での経験を活かし、「香椎宮」再興を支援することを目的としている。香椎宮では、高い格式を有しているにも拘わらず、香椎宮に対する周辺地域の人々の意識が低く、歴史的・伝統的価値の共有がなされているとは言えない。近隣住民の中には、香椎宮が宇佐宮に並ぶ高い格式の神社であることや、勅祭社の意味すら知らない人々も多く、実態としての香椎宮がないがしろにされているのが実情である。そのような状況を覆し、現代にも通ずる明るく開かれた存在へと転換し、人々に広く受け入れもらう香椎宮のイメージづくりのための試策を行うことが本研究の目的である。

3. 神社概説および着想に至った経緯

全国の神社は一様に神社本庁の管轄下にあるが、宮司を含む神社職員の給与や神社の経営は基本的に独立採算制でまかなわれている。神社の収入源は、お賽銭と授与品販売などの初穂料、祈願・祈祷などの玉串料、祭礼時の奉納金などの寄付金などであり、政府から支出されるのは、香椎造りの本殿のような重要文化財の修復が「必要」と判断された場合のみである。

一方で、香椎宮の参拝者は近隣の神社に比べ非常に少ない。結果として、神社の総収入が低いことになる。

たとえば、正月三ヶ日を含む年間の参拝者数について、10万人を下回る香椎宮に対し、近隣の管崎宮は50万人、宗像大社は56万人、太宰府天満宮は204万人と、その数に圧倒的な差が生じて

いる^(注1)。

香椎宮の参拝者数が少ない原因はいくつか考えられるが、アクセスを例に挙げても、香椎宮近隣のJRおよび西鉄の駅や3号線上のバス停などから香椎宮までの案内板などはなく、参道上にもない。参道入り口には、頂部に「近代社格制度」の名残を示す彫刻された「官幣」の文字がコンクリートで無惨に塗りつぶされている大きな石碑が立っているだけである^(注2)(図1)。参道を800mほど進むと左手に鳥居が現れ香椎宮の入り口を示しているが、その歴史・伝説・社格などを詳しく解説するパネルなどはない。小さな太鼓橋を渡って境内に入ると左手に弁財天社を擁する菖蒲池があり、さらに先へ進むと右手には午後3時半に閉店する休憩所と暗く不安な雰囲気のお手洗いがあり、うら寂しく近寄りたがたい。左手に視線を向けると境内にも拘わらず隣接する飲食店の看板が無許可で設置され、やや違和感を感じる。二つ目の鳥居をくぐり明治期には存在しなかった太鼓橋を渡ると、1903(明治36)年再建の堂々たる楼門があり、左手には絵馬殿や武内宿禰神社、猿田彦大神をまつる小祠がある。楼門を背後に進むと、1845(弘化元)年に建てられた独特のプロポーシオンを備えた狛犬像が左右に並び立ち、その間の正面の階段を上るとその先には御神木「綾杉」が威風堂々とそびえる。綾杉の奥には稲荷神社と鶏石神社が並び、その右手奥の「亀の池」の周囲は草木がうっそうと生い茂り、ほとんど手入れされていない。綾杉を右手に見て左の階段を上り中門をくぐると拝殿・幣殿があり、賽銭箱の奥には朱色の格子状の透塀に囲まれた重要文化財の本殿がある。本殿の右手には授与品授受の小屋があり、お守り・おみくじ・絵馬・御朱印帳など限られたアイテムの品々が並べられ、玉垣の外東側には巻尾神社がある。

(注1)【参拝客データ】

太宰府天満宮 https://sp.jorudan.co.jp/newyear/rank_visitor.html

宗像大社 http://jinjain.jp/modules/contents/index.php?content_id=186

管崎宮 https://sp.jorudan.co.jp/newyear/spot_0183.html

香椎宮 権禰宣談

(注2) 1946年の連合国軍再考司令官総司令部の進藤指令により、石碑に彫られた社格標がセメントで埋められた。



図1. 「官幣」の文字が塗りつぶされた参道入り口の石碑

これらを総合的に調査し、分析すると、神社そのものが潜在的にもつ観光資源は多く、著名な神社に比肩するいわれや伝説を備えているのだが、現在の神社職員の努力や工夫が参拝者増などの数字に反映されているとは言いがたい。神社本庁の管轄下であり、神社が独立採算制である限り、たとえ神聖なる領域にあったとしても、いずれの神社も運営上の努力や工夫は必要である。それは、太宰府天満宮が九州国立博物館を誘致することに長年尽力し参道の美化整備を行って九州随一の観光名所になったことや、宮崎宮が福岡の財界と連携し収益の高い祭礼を執り行っている例を見れば明らかである。

結果、香椎宮の参拝者数は、宮崎宮・宗像大社の1/5、太宰府天満宮の1/20となり、財政的・環境的に多くの問題を湧きさせているのである。

香椎宮は格式の高さ故に、過去、公報に消極的であり、それが原因で時代に乗り遅れたとする説(氏子談)があるものの、研究者はそれに加え、これまで挙げたような公共交通機関からの動線不案内・不安で暗い境内の環境・限定された種類の授与品などの「負のシナジー効果」も働き、現在のような状況を招いているのではないかと分析している。

4. 研究遂行の可能性について

研究者は、2014年4月より、福島八幡宮(福岡県、八女市)境内で行われる民間伝承にもとづく芸術表現を実施するデザインマネジメントに携わっている。福島八幡宮では、重要無形民俗文化財の「燈籠人形芝居」が伝統的に守られてきたが、江戸末期の緊縮財政や昭和の大戦の際、人形・大道具・小道具・背景幕などの破損・汚損・逸失・散逸がおこり、メンテナンスのされない道具類の老朽化も進んでいたことから、自然と後継者不足に陥り、人形芝居の上演が困難な状況になっていた。2013年秋に「燈籠人形保存会」から研究者に背景幕の修復・制作の依頼があり、日本画教員の協力のもと授業のテーマに取り入れ、2014年から制作・提供が行われている。事業経過と成果については、毎年2月から3月にかけて開催する「九産大プロデュース展」(IMS)で展示・報告している(図2)。

研究者は、上記福島八幡宮の背景幕制作に関わる経験をモデルケースに、「香椎宮」にあった方法論を模索し、2016年から学生とともにイメージの刷新をめざしてさまざまな取組みを行っている。

計画当初から、宮司・権禰宜・他の神職・香椎商工会連盟・福岡市などに対し説明会を開催し、



図2. 八女福島燈籠人形背景幕制作掲載新聞記事 /西日本新聞H.30.9.12(水)



図3. 2018年9月17日、香椎宮宮司・権禰直・福岡市職員を招いたプレゼンテーション

その後打ち合わせを行うなかで、将来に向けた新たなイメージづくりの青写真を設計し、理解を得ることができた（図3）。

加えて、今年度の計画から、情報デザインの教員と協力し、香椎宮をテーマとした映像作品を香椎宮で公開し、WEB上にアップすることも試みている。

このように、既に成功裡に働いている他の神社を対象としたデザインマネジメント原理を適用し、香椎宮にあった方法論で振興の支援を行うことができると確信している。

5. 2018年度に実施された再興活動

「香椎宮」の再興支援活動は2018年11月10日（土）の「お茶会再現」から徐々に具体化していった。当日、境内で新古今和歌集の歌から着想を得たテーマ「来しかたの香椎を映やすお茶の会」を、野点形式で行った。お茶会会場には明治期から昭和の初めまでに撮影された香椎宮境内や参道の古写真を展示し、「香椎宮の明治期から現在に至る」建造物的・環境的变化を解説したキャプションを配備した（図4、5、6）。次の支援活動として、参道入り口から香椎宮までの案内板を参道歩道上に設置し、香椎宮まで不案内であった動線を改善した。公道上に設置する場合は国・県・市など所轄する機関の許可が必要であり、それぞれが設けている規制をクリアし、認可登録業者に発注しな



図4. 2018年11月10日開催「来しかたの香椎を映やすお茶の会」風景



図5. 明治期の古写真 楼門の棟上げ式



図6. お茶会の様子を伝える報道
11月26日付朝日新聞

ければならない。また、案内板の大きさ・素材・設置する高さ・緩衝剤・その後のメンテナンスについても難題山積であったが、福岡市東区や業者の協力で2019年3月5日および3月20日の2回に分け、参道入り口から香椎宮までのおおよそ800m間の100mごと、街路灯に巻き付ける形式で8枚のウレタン素材の案内板が取り付けられた。神職の装束色である浅葱色をサインボードのイメージ色として用い、香椎宮をうたった歌や伝記をそれぞれ書き添えた(図7、8)。次に実施したことは、年間を通して香椎宮の尊さやモットーを広報するポスターを制作し、境内およびJR香椎駅に



図7. 参道歩道上案内板設置風景

2019.3.7 西日本 カラー



図8. 2019年3月7日付朝日新聞



図9. 境内に掲示されている歳時ポスター

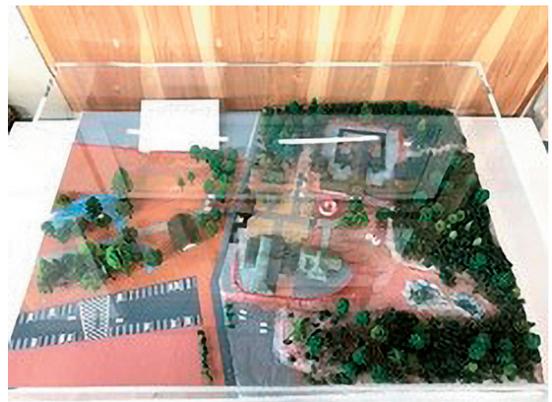


図10. 境内施設に設置されたジオラマ

掲示した(図9)。そして2019年7月には、子供にも親しまれるような「身近な存在の香椎宮ジオラマ」を制作し、巫女からは「普段見ることができない上からの香椎宮を見渡すことができ、とても新鮮」と高い評価を得た(2019年7月16日付「巫女だより」)(図10)。

6. 2019年度10月時点で実施・完了した計画とその後の研究計画

2019年8月10日、社務所大広間で「夏休み企画 親子でたのしむ 塗り絵ワークショップ」を開催した。ワークショップ内容は、香椎宮境内の風景や境内で見られる花々をポストカードに線画で描いた下絵を準備し、参加者に水彩絵の具で着色してもらうというものであった。参拝に訪れた親子づれが参加し、夏休みのひとときを楽しんだ(図11)。

さらに9月には、情報デザイン（ソーシャルデザイン学科）の教員の協力のもと、奏楽殿で香椎宮雅楽保存会による舞や雅楽の演奏が行われる祭事「観月祭」に合わせ、楼門・壁面・階段などにビデオ・プロジェクションの投影を試みた（図13）。投影作品は香椎宮の祭祀に配慮した、環境ビデオと音楽である。ビデオ・プロジェクション投影の広報は、香椎宮HPや大学HPで行い、事前周知を徹底した。その結果、例年50名ほどだった観月祭観覧者（香椎宮権禰宜談）は、宮司らの予想をはるかに超える12倍の580人以上を数える盛況ぶりだった。当日の聞き取り調査では、「幻想的」「次回の投影はいつ」「香椎宮の

イメージが現代に追いついた」「もっと別の作品が見たい」など香椎宮に対するイメージの刷新に貢献する結果をもたらす盛況ぶりとなった（図12）。

2019年10月時点で継続して取り組んでいる計画は、参拝客増加のためのワークショップ企画（11月）およびイベント開催計画（2020年1月末）と授与品・頒布品企画などである。ワークショップおよびイベント企画においては、社務所や勅使館を会場として家族連れに親しみを感じられるワークショップ・お茶会などを企画し、授与品制作については、参拝者が足を止め、再来・再拝に繋がる魅力的な授与品製作を引き続き考案している。加えて、香椎宮やその周辺に見られる穴場マップを製作し、さらに親しみをもつことのできる企画を考案中である。

7. まとめ

本研究では問題の発見から解決・結果報告までを一貫したサイクルで行うことを一つの目的としている。結果として、「ヒトと社会の未来を、みんなでデザインするーヒトと社会の課題を解決するデザイナー」、すなわち教員個人の研究だけでなく、他分野の専門家や学生らと繋がり、協力関係を築きながらデザイン力を用いた、より良い地域・企業づくりに貢献する方法論の一部が見えて来た。

「香椎宮」がかつての「官幣大社」・現在の「別表に掲げる神社」・我が国に16社しか存在しない「勅祭社」のひとつであるという高い格式を備えながら、影の薄い存在となり、忘却の縁にあるのは、宣伝することを好まなかったことが原因の一つとも言えるが、明確な原因はわからない。しかし、学生とともに毎年「香椎宮」再興のためのイメージづくりの提案をする過程で、氏子を含む神社の方々の理解も得られるようになり、2018年秋から2019年初夏にかけて計画が実を結び始めたことは事実である（図3）。

2019年は皇位継承という歴史的出来事もあり、天皇家にゆかりのある「香椎宮」が明るいイメージへ転換することは非常に慶ばしいことである。



図11. 塗り絵ワークショップポスター



図12. 楼門へのビデオ・プロジェクション投影



図13. 階段へのビデオ・プロジェクション投影

このような機会に、大学が勅祭社・香椎宮のありべき尊厳を取り戻すことに貢献し、平安末期以来の歴史と伝統を大切に守るとともに新たな時代に即した開かれた神社のイメージを後世に伝えることに貢献することができるかと確信した。